



中世の聖堂における彫刻とステンドグラスの関係

木保 元一

中世ヨーロッパの聖堂を訪れると、その外側の姿と内部に入ったときの印象が大きく異なることに驚かされる。聖堂の外部と内部はさまざまな点で対照的で、相互に補完しあうような関係にある。

外部は聖堂のある都市空間からばかりでなく、さらにそのはるか外からも、不特定の人々が放つ視線に向けられている。他方、内部は聖堂内に集まった信徒や聖職者という限られた人々のまなざしの対象となる。

外部からは内部が見えず、内部からは外部が見えない。コインやページの表裏のように、両者は切り離すことができず一体となりながらも、双方を同時には見られないという関係にある。外壁に置かれた彫刻と内部から見られるステンドグラスが、キリストの生涯をはじめ、しばしば同じ主題を描写するが、これも各々が異なった役割を果たしていることを示している。

聖堂の外壁には多数の彫刻が置かれているが、とくに入り口の周辺にある彫像は等身大をやや越えるスケールで、石の塊としての圧倒的な存在感を示しつつこちらに迫ってくる。これらの彫像は聖堂建築と文字通り一体化しており、彫刻により三次元で実体化された旧約聖書の族長や預言者、新約聖書の使徒、聖人たちがまさにキリスト教会という建築物を支えているという理念をそのまま具現する。

これに対して建物の中の暗闇に浮かび上がるステンドグラスは、巨大な石の塊である聖堂建築にうがたれた開口部、すなわち石のない空虚な部分に設置されている。光を透過するステンドグラスは、物質的な不透明性や重みから解放された天上的ともいえる軽やかさをまとい、垂直方向に引き延ばされた窓の形状とも合致して、わたしたちから遠ざかっていくような感覚をもたらす。ガラスという輝く素材は、わたしたちの頭上にヴェールのように広がる天空を想起させ、同じように地上と天上、見る者と聖なる存在を隔てながら結びつけている。

このように、中世の聖堂を外部と内部を含むひとつの全体として見たときに、どのような位置を与えられているかという点も、ステンドグラスの世界を理解するためには大切であるように思われる。彫刻の物質性と近さ、ステンドグラスの非物質性と遠さは対をなしながら、お互いを際立たせ、補い合っているのではないだろうか。物質的な存在感は、いわばその裏返しとしてそれが物質に過ぎないという面を強く印象づける結果となる。そのため、キリストであれ聖母であれ、いかにリアルに見えようとも彫刻によってかたどられた聖なる存在そのものは実は今ここには不在なのだという感覚が強められる。ステンドグラスは、このような欠落感を埋めてくれるわけではない。むしろ、彫刻の物質性とステンドグラスの非物質性のあいだに生じる落差によってそれをさらに強めてしまう。しかし、このことには大きな意味がある。

美術が素材によって提示するリアルな「存在」をリアルな「不在」へと転換させること、これは中世美術をめぐる経験の質を根本的に変化させる一種の触媒として機能する。美術が肉眼でとらえられるものだけで完結せず、さらにその向こうに見えないものを秘めているということが喚起され、見る者の内面に、今ここにはいない存在を志向するまなざしが立ち上がるのである。

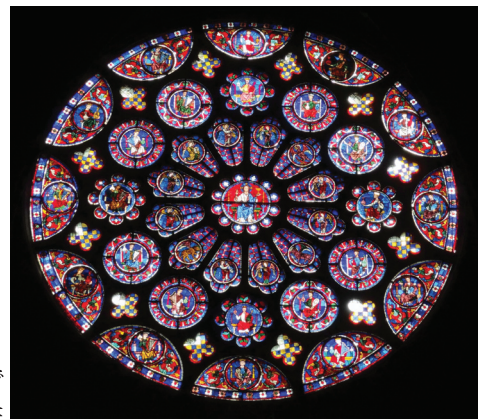
(KIMATA, Motokazu : 名古屋大学大学院文学研究科教授)

ステンドグラスと光

石田昌久、紅露剛、坂倉直美、関谷治代

「神は光であり、神には闇が全くないということです」(ヨハネの手紙一1章5節)

“光”という言葉は聖書に何度出現するのだろうか。神は光なり。神である光がガラス窓を透過して私たちに語りかける。そのガラス窓には聖書の話を題材にした絵や模様が表現され、かつては文字が読めない人々にとって聖書の代わりとなったステンドグラス。信者であるなしにかかわらず私たちを惹きつけてやまないステンドグラス。前号で採り上げた聖歌同様、キリスト教と縁の深い芸術であるステンドグラスについて、宗教・社会・文化的背景から日本への伝播、本学園内外の教会等キリスト教関係施設に据えられた作品などに“光”を当ててみたい。



シャルトル大聖堂 (写真提供 木俣元一)

はじめに

ステンドグラス(Stained Glass)は、直訳すれば“着色されたガラス”ということになるだろうが、ここでは「ガラスを鉛などの枠でつなぎ合わせたもの」という広義の理解をしておきたい。ガラスと一口に言っても、色ガラスもあれば透明なガラスに彩色を施したもの、ガラスに絵が描かれたもの、複数の色ガラスを重ね合わせたものなど様々であり、枠も鉛とは限らない。また、その技法をガラス工芸に活かされたものなどがあるが、私たちが取扱うのは専ら教会等の建築物に嵌め込まれた彩色絵窓ガラス、ということになる。

さて、メソポタミア、エジプトといった古代文明に端を発するガラスが、どのような経緯でステンドグラスへと辿りつくのか、その歴史を紐解くのも興味をそそるが割愛する。現存する最古のステンドグラスとしては9～10世紀頃のものがあがるが、内容を比較して論ずることが可能なほど多くの作品が創られるのは、さらに時代が下った12～13世紀である。このうち12世紀後半から13世紀にかけては、フランス北部を中心にカテドラルと呼ばれる大聖堂が次々と建てられた時代であり、まさにこの大聖堂こそがステンドグラスとは切っても切り離せない関係にある。よって、やや遠回りになるが、大聖堂が競って建立された時代の背景、ゴシックと後に形容される建築様式について見てゆきたい。

第1章 ステンドグラスの歴史

1. 中世ヨーロッパの時代背景

異民族の侵入も落ち着き、終末と考えられていた10世紀を越えて11世紀も半ばを過ぎた頃から、中世ヨーロッパ、特に北フランスでは、ようやく平和と温暖な気候を取り戻しはじめた。それまでの人々・集落は、鬱蒼とした森林の大自然に埋もれて孤立し、疲弊と貧困のなかで細々と暮らしていた。取り戻した活力は、人々を土地の開墾へと駆り立て、農具や農法(三圃制;春播き用畑、夏播き用畑、休耕地の3つに分けて役割を順次回転させる農法)の改革と相俟って、農作物の収穫高が飛躍的に向上することとなる。ところが皮肉なことに、農業改革は労働力の余剰をもたらし、職にありつけない者は都市へ移動せざるを得なくなった。そして、過疎化・衰退していた昔日のローマ都市は、農村から移住した人々によって興隆へと向かうのである。

こうして都市に住み始めた人々であるが、地縁・血縁が濃密な人間関係にある農村に比べ、都市は無関係な人間の集合体である。人々はそこに留めのない不安を抱え、新たな共生原理を求めていた。確かに、同業組合であるギルドやコミュニースと呼ばれるギルド横断的制度もあるにはあったが、片や親方・職人・徒弟という厳しい上下関係に縛られており、片や自治と治安のための何ら味気ない法的制度であった。両制度の外に置かれた者も多くおり、普遍的な宗教原理が求められていたのである。

ところで、元来それぞれの土地に根ざした地母神を崇拝する土壌があった。冬の枯れ木が夏には青々と生い茂る森林、収穫物をもたらす母なる大地、こうした自然と否応なく向き合う農業を生業とする人々は、大自然に翻弄されながらも大自然を神として信仰していた。しかし、やむなく都市民となった人々にとっては、母なる大自然に代わる信仰の対象が必要であった。それこそが「聖アンナによる聖母マリアの無原罪懐胎」(マリアの母アンナが接吻によりマリアを身籠ったという)信仰である。しかも、出身地の独自性を強調しては溝が深まるばかりであるから、都市民が共有できるような普遍性を持つという意味でも聖母マリアの民間信仰は格好であった。さらには、最後の審判で問われる罪を贖いたい人々にとって、マリアは天国行きをイエスに執り成してくれる仲介者としても急速に信仰を広めていった。そして信仰を共有する場、共生の場を望んでいたのである。

一方、これとは別の思惑で、国王やカトリック教会側でも大聖堂の建設を望んでいた。国王は凋落の極みにあった権

威を回復させるための象徴として、カトリックの司教たちは元々異教徒であった農村出身の都市民に対する布教の拠点として、である。

2. ゴシックの大聖堂

大聖堂(カテドラル)は単なる“大きな聖堂”ではなく、司教の座る椅子＝司教座(カテドラ cathedra;ラテン語)に由来し、つまりは司教が配置された教区にある教会堂を意味する。この大聖堂がより高く、より荘厳華麗になったのは、ゴシックと呼ばれる建築様式になってからである。ゴシック建築の特徴として、a. 神に近づこうと天に向かって聳える昇高指向を具現化する、先の尖ったアーチ(尖頭天井;尖頭ヴォールト)、b. これを支える聖堂の外側に建てられた壁柱(控え壁;バットレス)と、尖頭アーチの重みで外へ張り出す重力を食い止めるために控え壁から外壁へと斜めに架けられたアーチ(飛び梁;フライング・バットレス)、c. 以上の構造により側壁に縦長の大窓を嵌め込むことが可能な空間ができたこと、と言えるであろう。このことによって、ステンドグラスはより大きく華やかで壮麗に、そしてより洗練されて輝きを増すように発展していった。

その嚆矢はパリ近郊サン・ドニ修道院付属教会堂の改修工事(1140-44)であり、冒険的で刺激に満ちた外観やステンドグラスの主題選びを含めて、時の修道院長シュジュール(1081-1151)の意向による。また、この教会堂には歴代フランス王が埋葬されていたため、当時のルイ七世王も多額の資金を投入している。加えて、お披露目の献堂式に各地の大司教、司教を招いたことが、大聖堂建設ブームの火付けとなった。これ以降の他の建設にも、様々な階層の人々による浄財の寄進だけでなく、歴代の王により威信回復策の一環として莫大な税金が注ぎ込まれ、約30年の間に数多くの大聖堂が建てられてゆく。ようやく建設熱が冷めるのは1270年頃である。もちろんシュジュール自身が実際に建てた訳ではないから、その背後にいる石工職人(建築家、技術者、芸術家を含む)たちの存在を忘れてはならない。また一方では、厳格な修道会として知られるシトー会の創始者である聖ベルナル(1090-1153)は、建設ラッシュを「虚栄のうちでも最高の虚栄、虚栄というより狂気のさた!教会堂は光り輝き、貧者は飢えに苦しむ!」¹⁾と批判している。

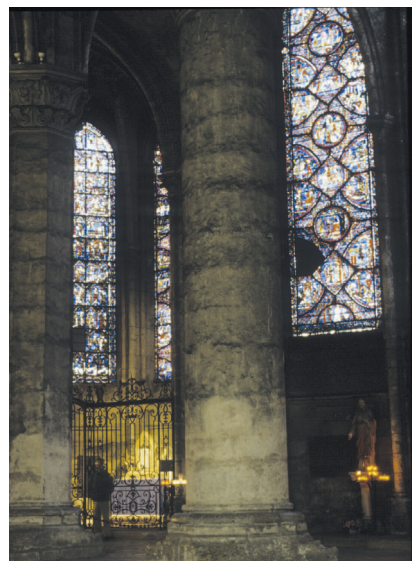
ともあれ、大聖堂には多くの会衆を集めることとなった。当時の大聖堂は静かで厳かな祈りの場であるばかりでなく、民衆の集会所でもあった。現在のような椅子は無く誰もが自由に出入りできたため、老若男女、身分、職業を問わず集まり、大声で話したり、飲食や寝泊りすることもあった。かつて抱かれた大自然、その森林の溢れる生命感を想わせる柱や、建物と分かち難く結びついた彫刻や絵画に囲まれた「神の家」＝大聖堂で、時には聖歌を唱い、時には宗教劇を観ながら、ここを拠り所として暮らしていた。

3. 大聖堂のステンドグラス

中世前半まで、人々はキリストや使徒たちにまつわる遺物に熱狂していた。実際に“モノ”に触れることによって聖なるものとつながる、という聖遺物崇拝の感情は解らないでもない。このため教会により競い合って聖遺物が探し求められたこともある。ところが次第に“モノ”ではなく、神の似姿、あるいは、神をイメージできるものへの信仰へと変化していった。教会の教えにより人々はそれらを神と認めるようになったのである。ステンドグラスを透過する“光”もそのひとつであった。しかもステンドグラスであれば、聖遺物触れたさに会衆が殺到することなく厳かにミサを進行できる。また会衆は、ラテン語の祈祷や文字が理解できなくとも、ステンドグラスと聖職者の解説によって、聖書やキリスト教の世界観、道徳観を学ぶことができたのである。

しかし、英仏百年戦争(1337-1453)とペストの流行(1348-50)によりステンドグラスやゴシック建築そのものが生命力を失ってゆく。そして、ルネサンスの時代に徹底的に批判された後は、18世紀末頃からのゴシックの復活までは、ステンドグラスやゴシック建築にとって受難の日々が続くのである。

ゴシック建築はフランスの北部地方に生まれ、ステンドグラスも同地方で発展した。後にルネサンスの人々が軽蔑の念を込めて「ゴシック Gothic」と呼んだのは不当だとしても、日射しが充分に明るい南ヨーロッパではなく、逆境にあった日陰の地域だからこそ、ゴシック建築いわずステンドグラスが発展したと考えるのは穿ちすぎであろうか。



シャルトル大聖堂(写真提供 木俣元一)

第2章 日本のステンドグラス:宇野澤辰雄と小川三知を中心に

現在、日本には300以上のステンドグラス工房が存在すると言われているが、国内へのステンドグラスの本格的な技術の導入は明治期以降である。最初、ヨーロッパから宇野澤辰雄(1867-1911)が、続いてアメリカから小川三知(1867-1928)が技術を導入した。そして、宇野澤と小川の流れをくむ工房が数多くの人材を輩出し、さらに国内の主要なステンドグラス工房が日本に誕生していく。二人はいわば日本における二大パイオニアである。

1) 『カテドラルを建てた人びと』(ジャン・ジェンベル著; 飯田喜四郎訳, 鹿島出版会, 1969), p.27

1. 宇野澤辰雄(ドイツ・ヨーロッパ系)

日本の本格的なステンドグラスの歴史は、宇野澤辰雄に始まる。

備後福山藩(現在の広島県東部を所領)の藩士の三男として生まれた宇野澤(旧姓山本)辰雄は、東京職工学校(現在の東京工業大学)機械科三年に在学中の1886(明治19)年、ベックマン貸費留学生の一員として選ばれてドイツに渡り、三年間に及ぶ厳しい修業期間、ステンドグラスとエッチングの技法をベルリンの工場で学び、帰国した。

帰国後、宇野澤は、東京府庁舎(1894年竣工)を手始めに、海軍省本館(同)、司法省庁舎(1895年竣工)、大審院(1896年竣工)等、明治政府の官公庁建築のステンドグラスの制作に関わり腕を振るった。その作品の意匠には、時代を反映してアールヌーヴォー様式のデザインの影響が多く見られる。

しかし、日清・日露戦争の影響から、当初予定されていた明治政府の一大官庁街構想は頓挫、国内のステンドグラスの需要も激減したため、宇野澤は1896年にステンドグラスの制作からやむなく撤退し、国産ポンプメーカーを興して転身してしまう。

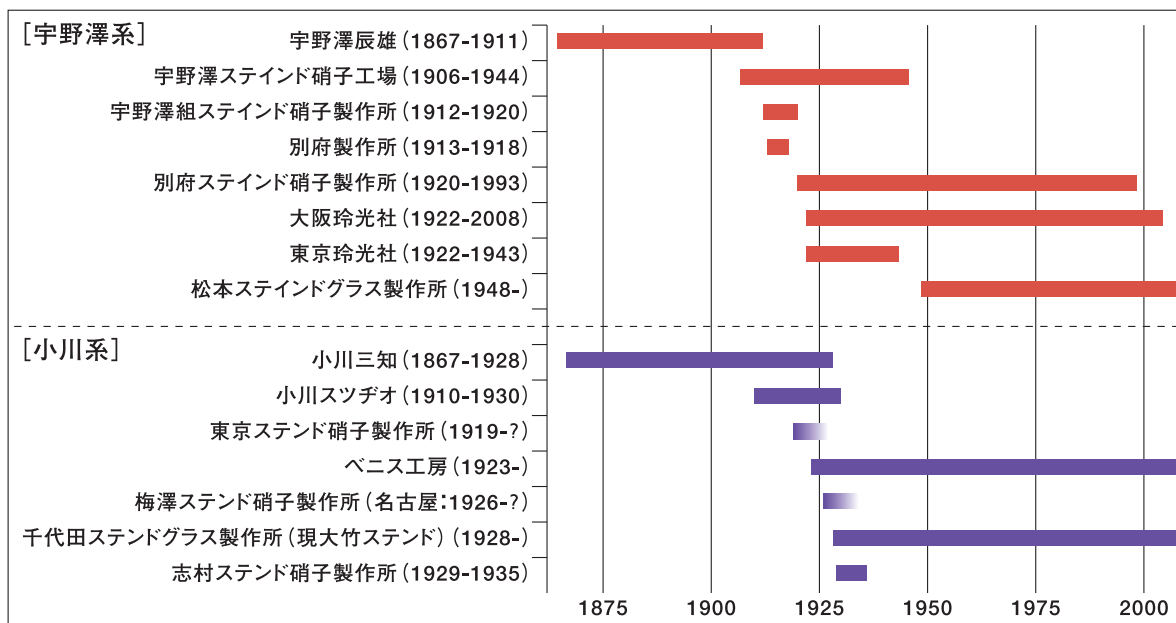
その後、自ら興した企業の発展に努力を傾注した宇野澤は、1911(明治44)年に無理がたたって病に倒れ、44歳で急死してしまう。小川三知が留学先のアメリカからステンドグラス修業を終えて帰国する半年前の出来事であった。

1-1. 宇野澤系のステンドグラス工房の系譜

宇野澤辰雄自身のステンドグラス制作は比較的短期に終わってしまったが、その当初の志をあたかも具現化するように、1906(明治39)年、辰雄の養父辰美がわが国初の本格的なステンドグラス工場である「宇野澤ステインド硝子工場」を設立し、初代工場長となる。これがその後の国内における宇野澤系のステンドグラス工房の基となった。

以後、宇野澤ステインド硝子工場からは、宇野澤組ステインド硝子製作所1912(大正1)年、別府ステインド硝子製作所(1920年)、大阪玲光社(1922年)、東京玲光社(1922年)など、有力なステンドグラス工房が数々興り、別府七郎、大竹龍蔵、森勇三、松本三郎ら、その後の日本のステンドグラス界を支える優れた技術者達を輩出した。戦後も、宇野澤ステインド硝子工場の直接の後継である松本ステインドグラス製作所をはじめ、宇野澤系のステンドグラス工房の流れは脈々と続き、日本のステンドグラス界を支える屋台骨の一つとなっている。

●宇野澤系・小川系の主要なステンドグラス工房チャート



2. 小川三知(アメリカ系)

「ア、おっかさん御覧なさいあの窓が鳴り出しましたよ」

宇野澤辰雄と並ぶわが国のステンドグラス界のパイオニアの一人である小川三知は、アメリカ式のステンドグラスに日本的な様式美を取り入れ、絵画性に富んだ芸術性の高いステンドグラスを制作したことで知られている。

三知は、宇野澤辰雄と同じ1867(慶応3)年、静岡県 の藩医の二男として生まれた。最初医学を志すが、幼い頃からの絵画への思いが断ち難く、家督を弟に譲ることを条件に、第一高等中学校を退学し、当時創設後間も無い東京美術学校日本画科へ入学する。

入学後、三知は、岡倉天心の紹介により、日本画家橋本雅邦に日本画を学ぶ。技術的な指導に加えて、三知は橋本雅邦の人格からも大きな影響を受けた。

卒業後、三知は、地方で教職についたのち、1900（明治33）年、シカゴ美術院の日本画教師としてアメリカに渡る。

三知の転機は渡米して就職したシカゴ美術院学長からステンドグラスの制作技術を学ぼう勧められたことだった。バイタリティあふれる三知は、全米の教会を訪ね歩いてステンドグラスの模写に没頭する日々を過ごし、己の知見を広げていった。

また、三知はアメリカ以外のヨーロッパ式のステンドグラスに関する造詣も深かったことが、三知の帰国後の講演録²⁾を読むと、良く分かる。冒頭に引用したのは、その講演録の一節で、とある教会で、母親に連れられて教会を訪れた子供が教会のステンドグラスを見て漏らした感想である³⁾。この子供の言葉の中に、三知は西洋絵画の持つ色彩表現（カラーブレンディング）と教会で奏でられるパイプオルガンの音色の共通性を見い出している。三知の持つ芸術家としての鋭い感性がここには良く表れている。

このように、三知の芸術家としてのバックボーンには、当時のアメリカで学んだ最新のステンドグラス制作技術、ヨーロッパ式のステンドグラスに関する深い見識、日本で橋本雅邦に師事して得た日本画家としての資質、対象を捉える鋭い観察眼などがあつたのであり、これらが渾然一体となって、小川三知の持つ高いステンドグラス技術を支えていた。

11年間におよぶアメリカでの生活を終え、三知は1911（明治44）年、帰国する。そして、日本メソジスト教会銀座教会（1911年）のステンドグラスを皮切りに、慶応義塾大学三田図書館（1912年）、安藤記念教会（1917年）、鳩山記念館（旧鳩山一郎邸 1924年）など、1928（昭和3）年に62歳で亡くなるまでの間に、生涯で200点近くの作品を残している。時代背景の違いから、宇野澤辰雄の作品が主として官庁建築用に制作されたのに対し、三知の作品の多くは民間の建築用に制作されているのが特徴のひとつである。

小川三知は、宇野澤辰雄の切り開いた日本の近代ステンドグラスを発展・進化させる役割を果たした。三知の工房には、敬愛する宇野澤辰雄の肖像写真が飾られていたと言う。⁴⁾

3. 日本的な美のステンドグラスによる表現

宇野澤辰雄や小川三知のステンドグラスには、透過ガラスをうまく生かした「借景」の表現、余白による空間表現など、自然との一体感を感じさせる日本的な美の表現が見られる。特に小川三知は、花鳥風月と空間の余白の組み合わせによる日本画的な表現を極限まで押し進めた作品（宮越邸、新喜楽、白糸などの民間建築のステンドグラス）を残している。

第3章 カトリック教会のステンドグラス

1. 布池教会の大聖堂

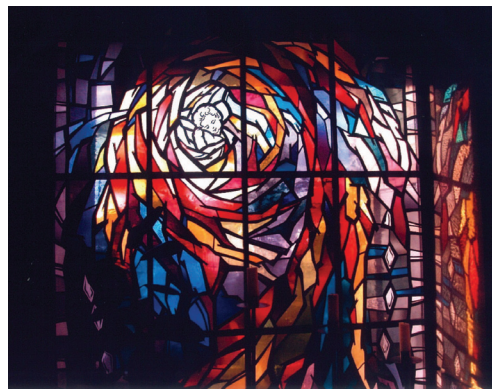
名古屋市内には16のカトリック教会がある。そのなかで聖堂にステンドグラスを持つ教会は確認できたもので6箇所あった。なんとといっても圧巻は愛知県の司教座聖堂である布池教会（名古屋市東区）。大聖堂には正面に十字架上のイエス、背面にはオルガンを奏でる聖セシリアの肖像。そして、大聖堂内の両側の長い窓には7つの秘跡をあらわすステンドグラスがある。聖堂に入るとまずはそれらの大きさ、美しさに圧倒される。

2. 柔らかな光を取り込む五反城教会のステンドグラス

南山学園の設立母体である神言修道会が擁する五反城教会（名古屋市中村区）、平針教会（名古屋市天白区）にもすてきなステンドグラスがある。五反城教会は1959年に献堂、在籍信徒数約800名で、大聖堂にはパイプオルガンが設置され、高い塔は近隣のシンボルになっている。聖堂の形はドーム型で、2階席の壁面に幾何学的な形状のステンドグラスが嵌め込まれている。全体的に黄色（鉛色）が基調になっており、聖堂入口付近は黄色、正面の祭壇後方は黄と青と赤⁵⁾が美しく交り合っている。シンプルなパターンだが、聖堂内に柔らかな光を取り込んでいる。

3. 平針教会のステンドグラス…渦巻きのなかの幼子イエス

平針教会は1979年に献堂、在籍信徒数約780名で、比較的新しい教会である。駐車場に車を止め、まず目につくのが、聖堂内に設置されたステンドグラスの裏側。正面から見るとどんなふうなのかと興味が高まる。玄関に回り、重厚な木製のドアを開けると、先ほど、裏側から見たステンドグラスが、正面の祭壇の後方にあり、神々しい光を放っている。その時、筆者は、赤ん坊が色とりどりのバラのような花びらに包まれてなんと安らかな寝顔なんだろうと思った。このステンドグラスの制作者はドイツ人女性のイスラ・フォン・ライストナー氏（1917-2008）。当時の主任司祭であるアーノルド・ブルム師は設置の経緯をこう話してくれた。



幼子イエス（写真提供 平針教会）

2) 「ステンドグラスに就て（承前完結）」小川三知（建築雑誌）26（304），p.149-164，1912/4/25

3) 同上，p.160

4) 『小川三知の世界』（増田彰久写真；田辺千代文，白揚社，2008），p.19

5) 三つの色、青、黄、赤は信仰愛を暗示している。青は信仰、黄は希望、赤は愛を表す。

「ライストナーさんはボルト師⁶⁾とヒルシュマイヤー師⁷⁾の知り合いというご縁でこの作品を平針教会にくださいました。この作品はドイツから船で運ばれて来たのですが、到着したのは献堂式の前日で、ステンドグラス一心工房⁸⁾の土屋さんが徹夜で作業してくださり無事に祭壇の後方に納められました。」

筆者がバラの花と思ったこの図柄は、ブルム師によると、「台風の渦巻き」。聖餐台の横に回り、ステンドグラス全体を眺めると、床面からうねるように渦巻きが始まっていて、確かに、台風の渦巻きのようなものである。台風の目は静かだから、その中に赤ん坊でも憩うことができるというのが作者の意図のようだ。献堂25周年記念誌(2004年5月13日発行)の中で、南山大学人文学部准教授 西脇純師はこう語っている。「このステンドグラスには母マリアの姿は描かれていません。……(中略) 幼子イエスの近くに配した赤や黄や水色が、あるいは母マリアの腕(かいな)を表しているのかもしれない」と。色彩と外光を極力抑えた静謐な聖堂内はステンドグラスから透過する柔らかなやさしい光で満たされていた。

4. 力強さと繊細さを併せ持つ大津教会のステンドグラス

次に、カトリック大津教会のステンドグラスを紹介したい。大津教会は名神高速道路大津インターを下りて琵琶湖方面に10分ほど走ったところ、JR膳所駅のすぐ近くにある。1907(明治40)年、パリ外国宣教会が大津市京町に伝道所を開き、その後、メリノール宣教会に移管され、現在に至る。最初は一軒家を借りての宣教活動であったが、1940(昭和15)年9月、当時の主任司祭であるバーン神父の手によって、現在の地に献堂された。在籍信徒数は575名、歴史的に古い教会である。

外観は、青い和瓦をいただく切妻造りの和風木造建築で、石段上にそびえる正面部分の白漆喰と重層する屋根がお城のような印象を与えている。十字窓のある入口扉を開け、聖堂の中に入ると、外観からは想像もつかないほどの見事な空間が展開している。白く高い天井、いくつもの半円形アーチの仕切り壁とそれを支えるタイル細工の円柱、さらに中に進むと、祭壇があり、それを挟んで両袖廊にお目当てのステンドグラスがあった。作者は信徒の池田薫氏(1931-)、訪問した日に、直接お話を伺うことができた。



キリストの洗礼(大津教会)

池田氏は40代の頃、ガラスアーティスト三浦啓子氏⁹⁾に師事し、数々の作品¹⁰⁾を手掛けてきた。ここにある2面のステンドグラスは「イエスがヨルダン川において洗礼者ヨハネから洗礼を受ける場面¹¹⁾」と「純潔を象徴する白百合に囲まれた聖母マリア」である。インターネットで初めて見たときの印象どおり、まずはルオーの宗教画を思わせる力強いタッチに感嘆のため息が出た。色とりどりの大小のガラスが縁取りの黒と融合し、この聖堂の空間にうまく溶け合っている。この作品を見るまで、ステンドグラスといえば色ガラスを鉛の枠で固定したものと思っていた。しかし、池田氏のステンドグラスは鉛ではなくエポキシ樹脂¹²⁾という、強力接着剤で固定されており、その樹脂が黒く太いためルオーの画風を思い起こさせる。「ロクレール」と呼ばれるこの手法は、厚さ3センチの分厚い色ガラスをハンマーでカットし、その断片一つ一つをエポキシ樹脂で接合していくものである。ステンドグラスの前に立ち、ガラスの部分に目を近づけてみる。分厚いガラスを割っているため、そのときにできる破形が貝がら状になっていて、ステンドグラスから入ってくる光に微かな輝きを与えている。そしてエポキシ樹脂の黒い縁取りが透過する光の影となり見る人の心におおらかな温かいものを感じさせる。



聖母マリア(大津教会)

祭壇両袖の限られた場所にこの二つの図柄を選んだ理由を池田氏に尋ねてみた。「祭壇向かって左は洗礼式を行う場所なので『キリストの洗礼』にしました。聖書に出てくる場面ですよ。画面を縁取るたくさんの丸いモチーフはキリストを象徴する葡萄です。向かって右のスペースにはマリア像が祀られているので、マリア様を選びました。」このマリアの図柄は、

6) 第7代南山学園理事長アルベルト・ボルト師(在任期間1963~1984)

7) 第3代南山大学長ヨハネス・ヒルシュマイヤー師(在任期間1972~1983)

8) ステンドグラス設置当時の社名はグリーンガラス工房

9) 神戸在住のガラスアーティスト。1972年、エポキシ樹脂を使用する「ロクレール」という手法を確立。日本ステンドグラス作家協会会長。東京国立博物館、兵庫県庁、名古屋第一赤十字病院、同志社大学、帝国ホテル等、納められた施設は数知れない。

10) 池田氏の作品は、ノートルダム今海道修道院(京都市)、カトリック夙川教会(西宮市)、カトリック芦屋教会、カトリック鷹取教会(神戸市)にある。

11) マタイ福音書3章13~17節、マルコ福音書1章9~11節、ルカ福音書3章21~22節に記述されている。

12) エポキシ樹脂は1938年スイスの化学者により発見された。以後、塗料、電気、土木建築の接着等の分野で利用されている。

17世紀半ばのスペインで好んで描かれた「無原罪のお宿り」と思われるが、白の衣にブルーのサッシュを腰に巻いているところからルルドに出現した聖母マリアにも見える。池田氏にどちらのマリアさまですか?と何度も尋ねてみたが、にこにこ笑いながら、「聖書の中のマリア様ですよ」と繰り返し答えられた。伝道師の父を持つ池田氏には、そのこだわりはなく、幼少の頃から心の中にずっと存在する聖母マリア様なのであろう。

第4章 南山学園のステンドグラス

南山学園の学校には、数々のステンドグラスがある。紙面の関係上全てを記すことは難しいため、大学周辺の学校から聖書をモチーフにしたステンドグラスを選んで解説する。

1. 南山大学附属小学校

1936(昭和11)年創立者ライネルス師により設立された南山小学校は2008(平成19)年に復活した。新たな建物には、児童の宗教性涵養に資する目的で、合計12枚のステンドグラスが設置されている。図柄は、旧約・新約聖書の内容から、児童が親しみやすいもの、児童に伝えたいものという観点で選ばれた。

聖堂には縦長のものが4枚、「神は偉大 その栄光は天地をおおう」(詩篇148)をモチーフとして、太陽・月・星座、地・稲妻・あられ・雪・霜、山・丘、木・けもの・地をはうもの・鳥・民・若者・おとめ・年長いた者・子供を表している。

階段と学習室には円形のものが8枚ある。1～2階階段右側に「世の光」(マタイ福音書5章14,16節)、1～2階階段左側に「ぶどうの木」(ヨハネ福音書15章5節)、2～3階階段右側に「潮の風」(マルコ福音書4章39節)、2～3階階段左側に「イエスの十字架」(マルコ福音書8章34節)、2階グループ学習室右側に「私はアルファでありオメガである」(黙示録22章13節他)、2階グループ学習室左側に「一粒の麦」(ヨハネ福音書12章24節)、3階グループ学習室右側に「平和の鳩」(創世記8章10～11節)、3階グループ学習室左側に「5つのパンと2匹の魚」(マルコ福音書6章41～43節)

原画は、シスター北爪悦子(師イエズス修道女会)、制作は宇野澤辰雄の流れをくむ松本ステインドグラス製作所である。宗教科の授業ではステンドグラスの意味を教えており、そのぬり絵が子供たちに好評である。

2. 南山高等・中学校 男子部

南山高等・中学校 男子部には全部で5箇所、18枚のステンドグラスがある。

チャペルにある「神を讃える」というモチーフのものが最も古く、チャペル完成時の1983年制作、原画はジョン・コンリス神言修道会司祭、施行業者はグリーングラス工房社長の土屋一心氏である。主玄関ホール欄間には「イエスの生涯」を中心に14枚、高校の階段2階踊り場には「聖家族と3人の博士たち」(新約聖書マタイ2章より)で、共に1986年制作、中学棟2階には、「主を探す3人の博士たち」(新約聖書マタイ2章より)で1988年制作である。これらの原画デザインは長崎純心大学の本田利光教授、制作は前出の土屋氏である。

最も新しいのは、2007年に高校の階段3階踊り場に設置された「主よ、行く手を照らしてください」(祈りの言葉)で、制作は東京の生田ステンドグラス工房である。現在教鞭を取られている、原画のデザインをされた熊川神父は、言葉で話して聴かせる「有言の教育」に対し、聖書の教えを描いたステンドグラスはいつの間にか生徒の心に染みるように入っていく「無言の教育」であり、「動く光の絵」となったステンドグラスは、生徒の心に長く残るだろうと語る。

3. 南山高等・中学校 女子部

南山高等・中学校 女子部に、ステンドグラスは2箇所ある。

まず、エントランスホールに、本田利光氏の原画による「すでに尊い」というタイトルで、四角く40に分割された枠に、イエスを抱くマリアの後ろにキリストが立つ図柄が描かれている。もうひとつは、チャペルにある9枚のステンドグラスである。右から順に、イエスを抱くマリア、噴火する山、飛び跳ねる魚、日本への布教、ヤンセン神父・ライネルス神父の肖像等、キリストの生誕から南山学園の創立の歴史を9つの場面で見ることができる。

4. 南山大学(旧南山短期大学)

従来、大学内にステンドグラスは無く、旧短期大学の建物にあった「受胎告知」が、現在、大学R棟7階(2010年度より短期大学部のある棟)に移設されている。これは、南山短期大学40周年を記念して、南翔会(南山短期大学同窓会)から寄付を受け、2008年9月25日に設置された。作成者は、イタリア人女性ステンドグラス作家のEmanuele Raffinetti氏である。



ぶどうの木(南山大学附属小学校)



ヤンセン神父とライネルス神父
(南山高等・中学校 女子部)

おわりに

ステンドグラスは、古よりキリスト教の流布に特別な役割を果たしてきた。教会の建物の一部となり、美しい輝きは主の輝きを具現化したものとして人々の信仰を深めてきたのである。それは、キリスト教の布教と共に海を渡り、長い時を経て、この日本の地に根付いた。各地にある教会は言うまでも無く、キリスト教教育を行う様々な学校には必ずと言ってよいほどステンドグラスがある。南山学園にも多くのステンドグラスが設置されており、それは時を超えて聖書の教えを輝かせ、教育の理念を実現する一翼を担っている。

今一度、薄暗い部屋で暮らしていた昔の人々が、ステンドグラスを初めて見た時の驚きと感動を思い描いてみよう。きっとこれまでに見慣れたステンドグラスが、より輝いて見えてくるはずである。

最後に、写真と巻頭言をご提供いただいた木俣元一氏、取材等ご協力をいただいたカトリック安城教会主任司祭のアーノルド・プルム師、カトリック平針教会主任司祭の森山勝文師、カトリック大津教会担当司祭のホセ・A・ロペス師、同役員の杉原正樹氏、同広報部守田亮子氏、南山学園関係者にお礼を申し上げる。

なお、紙面の関係上、あまり多くの写真を掲載できなかった。興味を持たれた方は、ぜひ関連のWebページをご覧ください、現地へ足を運んでいただければと思う。

【参考文献】

- 酒井健『ゴシックとは何か：大聖堂の精神史』（ちくま学芸文庫、2006）
 佐藤達生、木俣元一『図説大聖堂物語：ゴシックの建築と美術』（河出書房新社、2000）
 ジャン・ジェンペル著；飯田喜四郎訳『カテドラルを建てた人びと』（鹿島出版会、1969）
 宮本雅弘『ステンドグラス：大衆信仰を輝きに凝縮させた職人たち』（美術出版社、1985）
 ローレンス・リー他著；黒江光彦訳『Stained glass』（朝倉書店、1980）
 ヴァージニア・チエッフォ・ラガン他『世界ステンドグラス文化図鑑』（東洋書林、2005）
 志田政人『ステンドグラスの絵解き』（日貿出版社、2009）
 増田彰久、田辺千代『日本のステンドグラス 宇野澤辰雄の世界』（白揚社、2010）
 増田彰久、田辺千代『日本のステンドグラス 小川三知の世界』（白揚社、2008）
 伝統技法研究会『日本のステンドグラス：その歴史と魅力』（伝統技法研究会、2006）
 八木谷涼子編『日本の教会をたずねて』別冊太陽にほんのころ119（平凡社、2002）
 八木谷涼子編『日本の教会をたずねてⅡ』別冊太陽にほんのころ127（平凡社、2004）
 献堂25周年記念行事実行委員会『カトリック平針教会献堂25周年記念誌』（カトリック平針教会、2004）
 五十周年記念誌編集委員会『湖畔の聖母』（大津カトリック教会、1990）
 清瀬みさを『カトリック大津教会 湖畔の聖母：カトリック大津教会のステンドグラスについて』
 （〔NHK文化センター京都教室配布資料 講座名：名建築見て歩き、2011/6/9〕）
 『キリスト教とは何か。：聖書とは？教会とは？』（阪急コミュニケーションズ、2010）
 『保存版特集キリスト教入門』（ベストセラーズ、2010）
 南山大学附属小学校『2010年度学校案内 はじめの一步を大切にしたい。』
 南山大学附属小学校『わかみどり』創刊号～8号
 南山キリスト教教育センター編集『南山キリスト教教育センター通信ディグニタス』20号
 南山中学校・南山高等学校女子部『2006 School Guide』『2011 School Guide』
 南山中学校・南山高等学校女子部『同じ花を見て』（南山中学校・南山高等学校女子部、2007）
 南山中高等学校『創立70周年記念写真集』2004年3月
 「ステインドグラスに就て（承前完結）」小川三知（建築雑誌）26（304），p.149-164，1912/4/25
 「ステンドグラス作家・志田政人さん 光の聖地、教会ステンドグラス」志田政人（いきいき）149，p.196-199，2009/5
 「教会のステンドグラス」梅田紘子（日欧比較文化研究）13，p.2-12，2010/4
 「Keiko Miura GLASS ART IN ARCHITECTURE」<http://www.roclair.co.jp/> [accessed 2011.9.12]

（ISHIDA, Masahisa ; KORO, Go ; SAKAKURA, Naomi ; SEKIYA, Haruyo : 図書館事務課）

資料寄贈者等(前号以降～2011.10まで)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈していただきました。ここにお名前を掲載させていただきます、改めて謝意を表したいと存じます。

石川 寿氏、聖ヨゼフ修道院

本学図書館では、わが国におけるカトリックの歴史・文化・活動に関する資料を収集しております。
 皆様から資料の寄贈を賜りたくお願い申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス No.26 2011. 11. 1 発行

<http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/>

発行：南山大学図書館

カトリック文庫委員会

編集委員：石田昌久、坂倉直美

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone:052(832)3707/Fax:052(833)6986

* 図書館Webページでもご覧いただけます。